

書籍紹介



『ヒト、イヌと語る』

菊水健史・永澤美保 著

2023年2月
東京大学出版会 発行
192頁
定価 2,420円 (本体 2,200円 + 税)

浅川満彦 (酪農学園大学)

おそらく、評者のように1950年代に生まれ、いわゆる(往時はほぼ哺乳類と同義の)「動物」好きならば『人イヌにあう』(以下『あう』)を知らぬ者はいない。『ソロモンの指輪』や『攻撃』など他のローレンツ本とともに当該世代の通過儀礼的な名著群の一角を占めていた。ゆえに、『あう』は(昆虫や魚類などをモデルとしない、いわゆる高等な)「動物」に関する行動学を想起させる絶対的アイコンである。そして、『あう』へのオマージュであったことは、本書「参考文献」末尾の一番目立つ場所に書冊情報が掲載され、明示されていた(註:ただし出典は今世紀に文庫本化されたもの。初出単行本は1966年刊)。

邂逅後の深い語りあいへの移行は、所作的に自然の流れである。だからといって、単に本書を『あう』の続編的な「動物行動学」の最新研究の解説書と見なすのは早計であろう。イヌの「心」あるいはヒト-イヌ間に醸成された心的関係性などにかなり踏み込んだ意欲的作品(随筆)でもあった。

本文章題とそのキーワード的概要は次の通りである;第1章 はじまり(本書副題に記されたのイヌ個体の誕生,兄弟など),第2章 成長(開眼,探索行動,社会化など),第3章 新しい世界へ(強化学習,空間定位など),第4章 イヌの世界(maternal discipline,同調,情動伝染など),第5章 ヒトとイヌ(認知学習,喜びの脳部位,ヒトとの共生,鏡像自己認知など),第6章 絆の形成(オキシトシンなど),第7章 おわり。

いずれにしても、職として行動学を志向しない者は、本書を積極的に読み込まないかもしれない(第一、評者は、いわゆるネコ派だし...)。だが、昨今、野生含む動物全般で虐待問題と向き合う必要が生じている。関連法も厳格化された。しかし、その認識・立件化はあくまでも、ヒト側に立脚し、動物側の「心」はブラックボックス化されている。つまり、被害者である動物自身の辛さ・悲しさの視点は、当然ながら、欠落しているのである。

だが、いつまでも、「当然ながら」のままでよいのだろうか。たとえば、である。本ニュースレターでもご紹介頂いたが、評者拙著(浅川2021)で「動物の死は、自殺(自死)以外のほぼすべてにおいて、人の死と同じことが起こる」とした。早速これに対し、否定的コメントが寄せられた。すなわち、「動物でも心的原因で自殺するのではないか」というのだ。調べてみると、動物哲学・倫理学などの分野から「動物の自殺を否定する科学的根拠は無い」とするような論考は、確かに、存在した。が、これをそのまま受容するには、より詳細な動物行動学からの論証が必要とされよう(以上、浅川2023)。そのような泥縄的事情から本書を熟読したのだ。本書には、さすがに直截的記述は無かったものの、そういった行為に至らせしめるような強力な「心」を信ずるような瑞々しい見方には触れた気がした。大変刺激的であった。

引用文献

浅川満彦. 2021. 野生動物の法獣医学—もの言わぬ死体の叫び, 地人書館, 東京.

浅川満彦. 2023. 補遺—『野生動物の法獣医学』の死因から自殺を除外した背景. 北獣会誌 67(4): 12.